

ピーテル・ブリューゲル(父)作《サウロの回心》に関する一考察 —— 作品解釈を中心に

中田 明日佳 (京都大学)

ピーテル・ブリューゲル(父)作《サウロの回心》(ウィーン美術史美術館蔵)は画家晩年の物語画であり、その迫力ある山岳風景や、後姿の人物を配して鑑賞者の視線を巧みに誘導する手法等は、ブリューゲル様式の一つの集大成を示す。「サウロの回心」をめぐる聖書解釈においては、アウグスティヌス以来、召命に際し神がキリスト教迫害者サウロの高慢を打ち砕いたことが強調されてきたが、この見解は本作品にも反映されていると考えられる。

「高慢を捨て神に従え」という教訓とともに、本作品は政治的暗喩を含むと推測される。宗教改革はネーデルラントにも波及し、1560年代には新教徒の増加が無視できないものとなった。ネーデルラントの宗主国で厳格な旧教国であったスペインの国王フェリペ2世は、新教勢力を抑えるべく猛将アルバ公率いる大軍をネーデルラントに派遣する。軍事力を背景とした苛烈な異端派取締は軍到着以前より既に噂となり、新旧の宗派を問わず当地の人々を恐怖に陥れた。スペイン軍派遣は作品が完成するまさに1567年の出来事である。険しい山の描写が軍の通過したアルプス山脈を連想させること等より、本作品がスペイン軍到来への示唆を含む可能性をグリュック、グレゴリーらは指摘する。一方、山岳表現が元来画家の得意としたものである点等から、グロスマンやシュトリートベックらは政治的暗示の読み取りに慎重な態度をとる。作品解釈をめぐる最大の論点であるこの問題を受け、本発表では宗教劇テキストや著作の分析を通し、「サウロの回心」という主題や「聖パウロ的あり方」そのものに向けられた当時のネーデルラント特有の眼差しのなかで本作品を再考する。

まず、本作品とほぼ同時期にブラバント地方の修辞愛好家団体成員が執筆した「サウロの回心」劇に新たに着目し、サウロのキリスト教徒迫害に当時ネーデルラントで横行した異端派迫害が生々しいまでに投影されていたことを論証する。一方、本作品で画家はダマスクスの方向を指さすサウロの仕草に回心後の聖パウロとしての生き方を暗示するが、本発表では、平和な伝道を行った聖パウロのあり方こそが異宗派に対する理想的態度とされたことを指摘する。その論拠はブリューゲルと同じく地理学者オルテリウスのサークルに属していた人文主義者コールンヘルトの著作に求められる。彼は旧教徒に留まりつつ生涯あらゆる宗教的不寛容と闘い続けた。1582年刊の『良心の自由についての宗教会議』では、新旧教徒双方の不寛容を批判し異宗派間の対話の重要性を説くが、その際模範として提示したのがまさに聖パウロであったのである。新旧教徒の対立、スペインの異端派取締熾烈化への不安に直面しつつ制作された本作品には、異宗派に対する暴力的抑圧の放棄及び平和的対話と寛容こそがネーデルラントに必要なとする政治的信条が読み取れるのではなかろうか。